

イギリス経済史研究の一潮流

—R. H. トーニーの評価を中心として—

上原ゼミナール

森 本 義 輝

ヨーロッパ社会における近代歴史学の歴史的発展を、いかに把えるかの問題——ことに経済史学の歴史性をいかに把えるかは、今日から明日にかけての我国の研究者の課題となるべきだが、そういう意味の歴史学史の研究を媒介として現代の世界と日本の立つ位置を比定していく方法はないだろうか——これが私の研究の目的である。この研究目的にとって重要な意義をもつものは一見して非常に厳格なアカデミックな形態をとる歴史学的研究のもつ歴史性を逆につきとめていく方法をこそ見出さなければならないのだが、R・H・トーニー(1880年——)の場合この点での問題把握は著作が多面的にわたっているだけに、比較的容易なのではあるまいか。事実トーニーの著作は、政策的啓蒙的パンフレットを別にすれば、二つの種類に分けられる。即ち、「16世紀の農業問題」(1912年)「トマス・ウィルソン徴利論への序文」(1925年)「宗教と資本主義の興隆」(1926年)「セントリの興隆」(1941年)「同再論」(1954年)などの経済史的研究と、「獲得的社会」(1921年)「平等」(1931年)「攻撃その他」(1953年)など社会思想的あるいは社会哲学的作品とである。後者において開陳されているところの未来社会形成を志向したアクティブな中核的問題意識を基礎として展開されている前者をどう関連づけて理解するかが、私のオ一の課題となる。そのため私はトーニーのウェーバー批判のもつ意味を考えることから始めた。

彼の歴史意識の基調にはアングリカニズムの宗教心情がひかえ、その上に経済活動及び社会制度についての中世的倫理意識と中世的社会哲学の是認が確認されること、また彼のいわゆる獲得的社会(18世紀以来のイギリスを典型とする近代社会)の克服という実践的課題に即して未来社会像を機能的社會と名づけて原理的揭示を行つていることなどの点から必然的にトーニーの歴史研究対象は、16・17世紀イングランドに限定され、獲得的社会にいたる、いわば墮落の過程の回顧と分析が、彼のユニークな歴史学的研究となつて実つたといえる。この社会的墮落過程に関する彼の分析において、20世紀以来の方法論的課題がいかに消化されているかをみる必要がある。したがつて私のオ二の課題は、マ

ルクスが提起し、ウエーバーも試みているところのイデオロギーをふくむ上部構造と経済を基底とする下部構造の関連性の問題をトニーはどのように把握しているかという点についてである。この点トニーには意識的応答はみられないが、「宗教と資本主義の興隆」への「1937年序文」を転換期として1920年代と30年代前期には上部構造に、30年代後期から40年代には下部構造に、それぞれ重点が置かれていたこと、そして後者のような志向は17世紀後半については未だに彼によつては果されていないが、16世紀から17世紀前半にかけての「トニーの世紀」において実質的に問題化されているといふたい。1941年うち立てられた定説に対して挑んだ批判者トレヴァ・ローパーとの間に交わされた、いわゆるゼントリー論争（1953—4年）は上の事実を示している。

最後に才三の私の課題として彼の史料選択とその操作とそれによつて書き出された歴史像を実際の資料に即して検討する必要がある。そのためには、17世紀後半については、ダドレー・ノース卿「貿易論」（1691年）を、また16世紀については、ローパーとの間に交わされたゼントリー論争の際、統計的な資料として用いられたトマス・ウィルソン「英国の現状」（1600年）及びステイフキー・ペーパーズ（1580年—1620年）を私は選んだが、うち、ステイフキー・ペーパーズ、即ちノーフォークの治安判事ナザニエル・ベーコンのオフィシャル・ペーパーズを中心としてみた。

チューダースの召使としての治安判事ベーコンにあてられた中央枢密院よりの書簡や指令、あるいは地域人民より打ちあげられてきた諸種の請願などを骨子とするこのペーパーズは、王立歴史協会編のカムデン叢書（これは一橋大学図書館に大部分存在する）中の1915年H・W・サウンダー編のものとして1936年F・W・ブルックス編の補遺の二つより成るものである。これによつてベーコンの直面した地域の問題の中にノーフォーク地方の政情を生にうかがうことができる。

以上、要するにアングリカニズムの宗教心情を支えんとする背景的中核意識を16世紀を中心とする前景的諸問題の分析把握の中に消去した時に自覚されてきたトニーの歴史研究方法は、オーにアイデアの重視という方法を生かして16世紀イングランドの同時代人の批評の流れの中に、社会諸勢力間に新しい均衡が成立することを異議なく確認すること、及び才二にそのような事実の近代的統計による裏打ちを行うことであつたといえる。

このような「経済歴史評論」中に多くみられる、統計学的経済史をその歴史性において評価づけるには、どのような方法と準備によつてなさるべきか——これは私の将来に残されている課題に属しよう。